

016

令和7年度一般推薦入学試験問題

専門課題 小論文
(初等教育コース幼児教育専攻)

[注 意]

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 監督者の指示に従って、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
3. この冊子は問題用紙1枚と下書き用紙2枚です。この冊子と別の解答用紙は2枚です。印刷の不鮮明な箇所などがあれば申し出てください。
4. 解答は解答用紙の指定された場所に記入してください。
5. 解答に字数制限がある場合には、句読点をすべて字数に数えます。
6. この冊子は持ち帰ってください。

令和7年度一般推薦 専門課題 小論文 問題用紙
(初等教育コース幼児教育専攻)

次の文章を読み、問題1と問題2に答えなさい。

「わかる」は、言葉・名前を知ることから始まります。(中略)

言葉や名前は、人間が編み出した認識のためのツールです。この世の中にあるものは、名前がないままでは、その対象を切り分けて認識することができません。名前がない世界は無限の情報でしかないのです。五感で世界を感じていても、その感じが何かさえわからず、ただぼんやりと何かを感じるだけです。

存在している世界に区切りを入れ、分節し、それぞれに命名してはじめて、私たちはその対象を認識できるようになります。そして、「これから、いつもこの名前と呼ぼう」と誰かと共有することで言葉が生まれていきます。

私たち人間は、長い歴史の中で「動いているあれを〇〇と言おう」「この動物を△△としよう」「これはウサギかな。いや、ウサギに似ているけどここが少し違うからネズミと呼ぼう」などと、一定の基準で世界をどんどん分け、それぞれに名前をつけて共有してきました。

特定の対象の世界に区切りを入れて、「ここは××」と名付けて分けていく。

「こういうのを重いと言う。こういうのは軽いと言う」

「このような動きは、歩く。このような動きは、走る」

「この感覚は、かゆい。この感覚は、痛い。この感覚は、くすぐったい」

区切りを入れ、分節するとはどのようなことでしょうか。

たとえば、色の名前を見ると、その区切りのつけ方がよくわかります。世の中に存在している色はグラデーションになっていて明確な区切りはありませんが、「ここからここまでは黄色、ここからここまでは黄緑、ここからは緑色」と、視覚的な特徴によって、人間の都合で区切りを入れて名付けているのです。

日本には、浅葱色や藍色など、外国にはない色の名前がたくさんあります。このことから、色に対する感性の違いや、色の区切りを自然と関連させていることがわかります。同様に、イヌイットは、雪を表す言葉を複数持つと言われますが、言語が違えば、同じ雪を見ても、世界の認識のしかたが異なってくる可能性があるのです。これを、言語相対性(サピア=ウォーフの仮説)と言います。人の思考は、母語の言語に影響を受けるのです。

また、個人が新しい言葉を覚えていくときも、世界を切り分けて名前をつけ、そして認識するという最も初歩的な体験を個人でしていることとなります。

幼い子どもが話し始めた頃、乗り物全てを「ブーブー」と呼ぶことがあるかと思いますが。違いを認識し始めると、大きなものは「バス」小さなものは「ブーブー」と分かれるかもしれません。さらにそれぞれの特徴が見分けられるようになると、「救急車」「トラック」などと種類も増えていきます。車に興味がある子どもは小さな違いを見分け、メーカーや車種まで言えるようになるかもしれません。

あなたの目の前に何本か木が生えていたとしましょう。木に全く興味のない人にとっては、どれも「木」ですが、木に興味のある人にとっては、違うものに見えます。

「これはケヤキ。これはブナ。こっちはミズナラかな」

存在している木の世界に区切りを入れ、一定の分ける基準を知ることによって違いを認識できる。言葉や名前を知って見分けることは、世界の分節の特徴を知ることと同じです。言葉や名前と分節の特徴を紐づけて見分けられるようになったとき、その対象についての理解が深まっていきます。

言葉や名前を知るとは、「学び」の第一歩として、実はとても大きな意味があるのです。世界を認識していくための最も初歩的な方法であると同時に、その対象と自分の距離を近づける入り口に立つ行為だと言えるでしょう。

[汐見稔幸『教えから学びへ—教育にとって一番大切なこと—』河出書房新社(2021)より引用、一部改変]

問題1 言葉や名前は、認識することに関してどのような役割を果たしているか、著者の考えを260字以内で要約しなさい。

問題2 本文の内容を踏まえ、幼稚園教諭になる上で心がけるべき言葉との向き合い方について、あなたの考えを述べなさい。